

「子どもたちと“戦争”展」開催の軌跡

— 町家を活かした実践の記録 —

An Exhibit on the Experiences of War for Children
: Opening our Home as an Exhibit of a World War II-era Merchant Home

大沼郁子*

Ikuko ONUMA Tasho

要約 2018年12月8日・9日の2日間にわたり、宮城県村田町にある筆者の実家を無料開放して「子どもたちと“戦争”展」を開催した。12月8日は、太平洋戦争開戦の日だ。筆者の実家は江戸時代から続く商家である。この企画は、第二次世界大戦が宮城県の子どもたちの暮らしにどのように入りこみ、そして変えていったのかを今を生きる子どもたちに伝えるというものであった。「戦火をくぐり抜けた家屋」で、「戦時中の品々」を展示し、「終戦当時、小学1年生だった母の語り」をするという3つを柱にした。展示の仕方は、「戦争前」「戦争中」「戦争後」の3つのセクションに分けた。太平洋戦争がいきなりはじまったのではなく、戦前から社会の動きや人々の考え方があり、子どもたちを巻き込んだ戦中を経て、8月15日に戦争が終わってもなお苦しい闘いが続いたということを知ってもらいたい意図があった。また、地元の小学校の教師たちが、戦争前から戦争後まで、記録してきた「学校日誌」が見つかり、併せてそれも展示することができ、子どもたちの現実的な暮らしの様子を明確にすることができた。

キーワード：戦争展、子どもと戦争、太平洋戦争

Abstract On December 8 and 9, 2018, we held the “Children and War” exhibition at my family home in Muratamachi, Miyagi Prefecture. December 8th marks the date of the outbreak of the Pacific War. My family home is a merchant home that has stood since it was built in the Edo era (1603-1868). The exhibition centered on three central pillars: an exhibit titled “Homes that Survived the War,” a display of “Artifacts from the War,” and a talk entitled, “My Mother’s Memories of the War as a Seven-year-old Child” delivered by my mother, Etsuko. The exhibit was divided into three eras: before the war, during the war, and after the war. The main intent of the exhibition is to convey the extent to which both societal and human factors precipitated a war that was ultimately not entered into spontaneously. In addition, it also examines how children dragged into the war continued the painful struggle to survive long after the official victory over Japan was declared on August 15, 1945. In addition, we were able to locate and display an intimate record of the war as remembered by elementary school teachers who recorded “school diaries,” beginning before the outbreak of war and extending beyond its conclusion. By exhibiting these diaries, we can show the reality of life before, during, and after war for these elementary school children.

Key words : An Exhibit on the Experiences of War for Children, Children and War, World War II

【はじめに】

昨年2018年12月8日・9日の2日間にわたり、宮城県村田町にある筆者の実家を無料開放して「子

* 学術研究員
Researcher

どもたちと“戦争”展”を開催した。

この企画は数年前から構想していたことで、先の大戦が東北地方の宮城県にある小さな町の子どもの暮らしにどのように入りこみ、そして変えていったのかということ、現代を生きる子どもたちに伝える意図を持っている。筆者は、これまで児童文学や児童文化の研究をしてきて、特に日本における戦争を題材にした文学作品の内容、それを子どもたちに伝える時、ある違和感を持ってきた。

戦争体験をした人たちが経験談を語ることは大事だが、体験した人達の感情をそのまま子どもたちに感じて欲しいというやや押しつけがあること、一方、子どもたちは、戦争を物語の中の話や別世界の次元でしかとらえておらず、歴史の延長線上に自分がいるということを感じていない、ということを目の当たりしてきた。どちらが悪いということではない。川口ランディの「時の川」(注1)という作品に、被爆体験の語り部をする主人公と、それを聞かなければならない修学旅行の中学生との断絶を描いた短篇小説がある。ここに描かれている語り部と中学生の姿は、創作上のエピソードなのだろうが、戦後74年を経た現在の日本のありのままの姿と言えるであろう。戦争を伝えることで平和の持続を実現しなければという経験者と、平和の尊さを頭ではわかっているのに生理的に経験談を拒絶する若者たちである。

さらに日本における戦争を描いた児童文学作品は、銃後の子どもたちの空腹と空襲の恐怖が中心になっているというやや一面的な表現に偏りがちである。もちろん松谷みよ子の「直樹とゆう子の物語」シリーズに見られるアウシュビッツを取り上げたものや、原爆、731部隊をテーマにした作品もある。昨今の海外の児童文学で戦争を扱った作品には、戦後生まれの作家の書いたさまざまなアプローチのものが見られるようになってきた。戦勝国と敗戦国では戦争の捉え方も異なる。東京の子どもたちに疎開児童として親と引き離された辛さがあったように、地方では疎開児童を受け入れるという大変さがあった。その時代を生きた人々、そして子どもたち一人一人にそれぞれの戦争体験があったはずだ。今回の企画展では、全国的共通で使用される教科書では語ることがない歴史的な事実を伝えたかった。筆者自身、もちろん戦後生まれではあるが、歴史の中の戦争を自己に関わる問題であると捉えることができたのは、戦争を通り抜けた家屋で生まれ育ち、戦

中に使われた道具が身近にあったことが大きな理由だった。

【企画展「子どもたちと“戦争”展】

平成最後となる年の太平洋戦争開戦の日と翌日の二日間に集約し、「戦火をくぐり抜けた家屋」で、「戦時中の品々」を展示し、「終戦当時、小学1年生だった母の語り」をするという3つを柱にした。

展示については、「戦前」「戦中」「戦後」の3つのセクションに分けることとした。太平洋戦争がいきなりはじまったのではなく、戦前からの社会の動きや人々の考え方の変遷があり、子どもたちを巻き込んだ戦中を経て、8月15日に戦争が終わってもなお苦しい闘いが続いたということを知ってもらいたかった。歴史というものの点ではなく、継続の中にあるということを実感できるような展示を目指すこととした。

1. 条件

① 家屋 (Fig. 1)

現在、母が1人で暮らし商店を営んでいる筆者の実家は宮城県の南部に位置する村田町というところにある。江戸時代後期には紅花の交易をおこない、京都や大阪と商いをしてきた商家だった。幕末から明治にかけて、中国やインドからの安い紅花の流入や欧米からの化学染料が売り出されたことにより、



Fig. 1 The home where the exhibition was held

紅花交易は次第に衰退し、明治期には生糸を扱う商いへと移行した。そして戦後は雑貨や文房具を商う店になるという変貌を遂げてきた。宮城県村田町における紅花交易については母の執筆による『紅花と村田の一商人』（注2）に詳しい。

江戸後期に建てられた土蔵もあるが、店部分と母屋は大正2年の建物である。江戸期において、京都との交流があったこともあり、京都の町家風に間口が狭く、裏門まで細長い造りになっている。

平成に入ってから、郷土の歴史を学ぶため地元の小学生たちもたびたび訪れるようになった。そのため、個人宅・個人商店ではあるが、見学者や観光客の受け入れ、郷土の歴史を説明することにはすでに慣れていた。また東日本大震災以後、商店の2階部分を私設資料館として常時公開するようになり、会場としての条件がそろっていた。

② 学校日誌

今回の企画展にあたり、筆者の非常勤講師の勤務先の一つである宮城学院女子大学の平聡教授の調査研究の成果である村田国民学校（現・村田小学校）の学校日誌の一部をパネルにさせていただくことができた。村田小学校には、宮城県内でも最古級に属する明治17年（1885）年の日誌をはじめ、現在にいたるまで、膨大な量の日誌が保存されてきた。そのうち、昭和の前半頃までの分は村田町歴史みらい館に移され、さらその一部は町の文化財に指定されている。学校日誌が市町村の文化財に指定されたのは、県内初めてのことだ。

今回の企画にあたり、村田国民学校の日誌から、学校と戦争、地域と戦争に関わる記録を選び、展示させていただくことができた。

例えば、終戦後の学校日誌に「教科書削除ノ徹底」と記載されたパネルと併せて、当家に残された「教科書」を展示するという展示にした。このことによって、ただの遺物の展示に終わるのでなく、歴史の裏付けを取ることができた。これには地元資料館村田町みらい館の協力を得た。

具体的な学校日誌をパネルにしたリストの内容は次の通りである。

- (1) 開戦について（1941年12月8日）
- (2) 旗行列（1942年2月17日、18日）
- (3) 金属供出（1943年7月29日）
- (4) 配給について（1945年3月16日）(Fig.2)

- (5) 敗戦（1945年8月15日）
- (6) 教科書削除・墨塗り（1946年4月9日）
- (7) 戦後初の国政選挙（1946年4月10日）

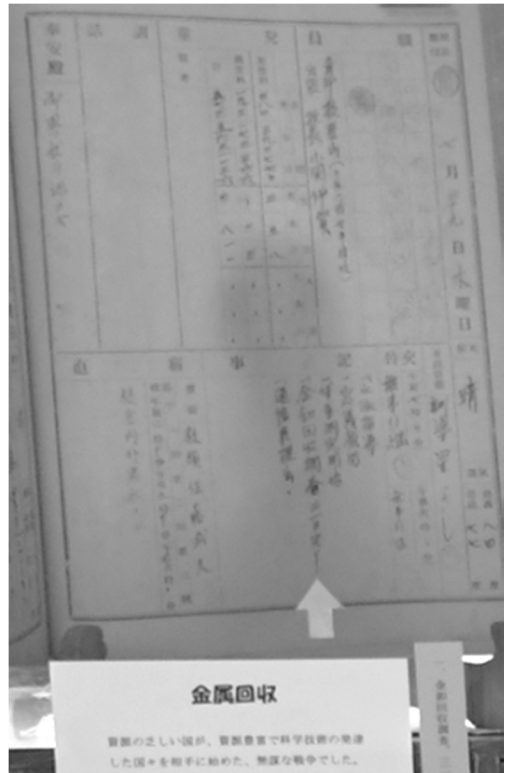


Fig. 2 An enlarged view of a school diary

③ 事前準備

事前の準備として、企画展の趣旨と展示物の説明を書いたパンフレット200部の発行、告知のチラシ300枚を作成し、各所へ送付した。それによって地元の新聞社（河北新報社）から、事前の取材、新聞掲載があった。新聞掲載によって、少なくとも宮城県内の地元の人達には周知してもらうことができた。

2. 展示の構成

展示の構成は3つのセクションに分けることにした。

① 戦争の前の`戦争、(Fig.3)

当時の子どもたちの生活に苦難を強いた太平洋戦争は、いきなり始まったものではない。それを知ってもらうために、戦前の資料の展示を行った。日

清戦争や日露戦争での勝利の記憶や好景気、領土の拡大などがあり、次の戦争へと突き進んで来たことを考えると、太平洋戦争前の歴史を語ることは重要だ。また昭和10年代に入ると、戦争へと向かわせる精神の高揚や敵国に対するマイナスのイメージを本や雑誌を通して見ることができる。以下は具体的に展示したものである。

(1)「日清・日露戦争の戦勝記念盃」－ これらは、かつて我が家で働いてくれていた若い人達が召集されて、戦場へ赴き、そして幸い無事に帰ってきた時に貰い、勤め先であったうちに持ち帰ったものだ。無事に帰ってきたことは幸いだったが、このような小さな盃と命を引き換えにしなければならなかったことを見てもらいたいと思った。

(2)「日露戦争時において実際使用された双眼鏡」－ 祖父の叔父にあたる人が日露戦争に行っており、その時に使ったものを祖父が貰い、その後筆者が貰い受けた。真鍮でできたもので、今も使用可能である。皮で出来たケースには、我が家の姓が書かれている。

(3)「愛国心を持たせる内容の教科書」－ 実際、我が家で育った子どもたちが使ったものもあるが、我が家は戦前、教科書の販売もしていたので、その在庫が今も残っている。特に地理の教科書や、地図を見てもらいたかった。日清・日露戦争後の地図には、北方領土や台湾、そして朝鮮も日本の領土であると記されている。教科書販売店であったため、教師用の教科書もあり、指導の意図や目的を知ることができる。

(4)「戦意高揚させるための少年雑誌」－ これは昭和4年生まれの大叔父が読んだものだと思う。またその雑誌の付録だった「日めくりカレンダーの台紙」が残っている。台紙には旭日旗がはたまく空の下、勇ましく戦う兵隊の絵柄が描かれている。雑誌の付録が残っていたのは珍しい。こうした読み物が影響したかどうか分からないが、この大叔父は後に陸軍幼年学校へと進学した。

(5)「婦人雑誌」－ 来場者が特に興味を持ったのは婦人雑誌の付録だった。子どもを勇ましく育てる

にはまずは母親から、という意図があったのだろう。「乃木大将の一代記」をはじめとする軍人の特集や、敵国となる米国のマイナス面を強調した雑誌の付録などがある。子どもの本ではなかったが、こうした母親たちの読み物の展示も行った。



Fig. 3 Materials on the Sino-Japanese War and the Russo-Japanese War

② 太平洋戦争の中で

(1)「学校日誌」－ 開戦当日の展示は、昭和16年12月8日の学校日誌の展示から始まる。英米を相手に開戦したことが記された日誌を拡大してパネルにして展示した。この日、地元の村田町国民学校では、児童たちを集めて日本が戦争に突入したことを記した日誌である。また昭和17年2月18日の日誌には「シンガポール占領」を祝って提灯行列を行った記録、その前日には旗行列の準備が行われていたことが記録されている。

(2)「家族写真」(Fig. 4)－ 昭和20年4月に写真屋を自宅に呼んで撮影したものである。16歳の大叔父が陸軍幼年学校だったため、いつ戦争に行くか分からないという状況だったため、「最期」になることを覚悟して撮影した写真であった。セーラー服を着ている筆者の母親はこの時、満6歳であった。

(3)「軍事訓練兵のための布団」－ 地方で軍事訓練をする際に、比較的大きな家屋を所有する家を選ばれていわゆる民泊させたということは、あまり知られていない。この訓練に際して兵隊たちを受け入れるために作った布団を展示した。家の屋号を入れた藍染め布団である。訓練や受け入れ先の状況にもよるが、当家には平均して一回につき10人弱の兵隊たちが宿泊することがあった。



Fig. 4 A photograph of my great uncle and my family before he went to war

(4)「疎開児童の受け入れ」 - 当家の向いに位置する本家には東京からの集団疎開の女子児童たちを 30 人ほど受け入れていた。現在この家屋は、町に寄贈してあり、「やましょう記念館」として、町の持ちものになっている。疎開児童たちのその集団写真の展示はもちろんだが、実際に東京の子どもたち受け入れた家屋も現存しているので、当家の展示場から道を隔てて建つ本家に移動して見学してもらった。今回の企画では、移動型の展示ということがひとつの特徴だった。文書に記された記録や写真も重要だが、見学者自身に体験してもらいたかった。実際に疎開児童が寝起きした部屋や、Fig. 5 の写真撮影をした庭を見てもらった。



Fig. 5 Child evacuees at this house
(1st to 3rd graders from Sugunami Elementary School No. 8)

(5)「防空頭巾・水筒」 - 当時、母が使用したものである。空襲警報が発令されると、玄関前に用意してある布団に防火用のバケツで水をかけたあと、3 歳年下の妹と裏庭の防空壕まで、避難する日々が続いた。見学者には、母たちが空襲警報のたびに避難した経路を歩いて体験してもらった。ただし、石畳が続く庭だったのと、2 日目は、雪がちらついて足元が悪くなったことがあり、この移動は大学生など、足がしっかりした若い人達だけの体験となり、高齢の見学者には不可となってしまった。

(6) 学校日誌「金釦回収」の記録と金属供出 - 昭和 18 年 7 月 29 日に金属回収の記録が残っている。学校日誌には「金釦回収」という語句で記される。これは物資窮乏のために金属供出させたことを指す。この日誌とともに台を外して石だけになった「指輪」も展示した。これは筆者が祖母から形見として受け継いだものだ。祖母は、筆者が結婚する際に「旦那さんに、プラチナか金で台をつけてもらいなさい」と言って渡してくれたが、筆者はアクセサリとして使用するよりも、史料になると思っていたのでそのままの形で保存していた。亡くなった祖母の記憶に学校の講堂に貴金属まで持って来させて、専門の業者にくり貫かせるということがあったと聞いていたので、それに相当する日誌の記録があるかどうか、宮城学院女子大学の大平聡教授に調べて貰ったところ、昭和 18 年の日誌が見つかった。



Fig. 6 A ring turned to stone

(7) 天秤と配給用の紙封筒 - 当家は商店であったため、配給をする側でもあった。配給の際に使用した天秤や小分けした袋の展示をした。学校日誌では、配給の切符を学校で配布した記録が残されていたので、それと併せて、我が家の天秤と塩や砂糖を入れた一回分の封筒を展示した。今回、この展示を通して、一口に「戦争体験」と言っても様々な立場の人がいて疎開児童を受け入れる側も居れば、物資窮乏の中で分配する立場の人も居て、人の数だけ思いがあったことを知って欲しかった。

他には、出征した当家の大伯父たちの軍隊手帳なども展示した。彼は徴兵されモンゴルに出征した。手帳の中身には大伯父の経歴と思われる内容と戦中に辿った経路が記されているが、それは後で紙を貼ったものであり、本来の正確な情報かどうか、今となってはさだかではない。

③ 戦争の後の「闘い」

1945年8月15日に、戦争は終結した。その日の学校日誌にも「玉音放送」の記録が残っている。当時、母は国民学校1年生であり、玉音放送のために校庭に集められたことは覚えているが、伝えられている内容が何を意味するものなのかまったくわからなかったと語る。ただ、校長先生はじめ、6年生の上級生たちが泣き出したことが不思議でならなかったと言う。

戦争は終結したが、それで闘いが終わったわけではなかった。深刻な食料不足や、これまでの教育を改革するといった苦難は続いた。学校日誌には「教科書削除」の記録がある。母が使ったページとページが糊付けされた音楽の教科書が残っている。目次から考えると、これは「ヘイタイさん」という題の歌が掲載されたページであると思われる。

また、祖父が戦後、商品の買い付けに上京した際、戦災孤児にねだられてあげてしまった「パン」を焼いた大鍋の展示もした。東京のアメ横などに、商品の買い付けに行った際、よく上野駅周辺にいた戦災孤児に囲まれて、「おじさん、なにかおくれよ」と言われたそうである。祖父は、自分の娘と同じくらいの子どもたちが浮浪児になっていることがたまたま、曾祖母が焼いたお弁当のパンを残らずあげてしまったという。特に骨董的価値のある鍋ではない。しかし、かつて亡き祖父が語っていた体験談とともに見

学者に伝えることで、8月15日に戦争が終わってもなお人々の闘いが続いたこと、そして、多くの子どもたちが犠牲になっていたことを分かってもらいたいという意図があった。

3. 母の語り

今回の企画は、ただの展示品を見るだけで終わるのではなく、防空壕への経路や、集団疎開受け入れた屋敷まで歩く、といった体験型にした。そして何より体験者の語りをライブで聞くという特徴を持たせた。これには語り部を引き受けてくれた母のおおいな協力を得たと言わねばならない。

当時、国民学校1年生の子どもだった筆者の「母親」に戦争体験を語ってもらうことで、戦争が遠い過去のことではなく、今、目の前で生きている人のことが経験したことなのだということを体感してもらいたかった。

母による語りは、2日間で7回ほど設けることができた。1回約20分程度、昭和20年7月10日仙台空襲の恐怖、集団疎開の子と友達になったことなどが中心に語られた。集団疎開については疎開した都会の子どもたちの思い出はよく語られているが、受け入れた側の思いというものもある。子どもだった母にとっては同世代の女の子たちが大勢来て楽しかったこと、よくうちの曾祖母が作る手作りの芋の飴などのおやつを狙って疎開児童が遊びに来ていたこと、その中の1人が、はしかのために帰らぬ人となったこと、彼女の母親が葬儀に間に合わず、やっと宮城県村田町に辿りついた時は、わが子が小さな壺に入った遺骨になっていたこと、その骨壺を抱きかかえて帰る若い母親を見送ったことが語られた。

また前述の「兵隊泊り」の時には、軍曹クラスの人が若い兵隊を、大した理由もないのに軍靴で殴りつけるのを目の当たりにして、幼いながらに理不尽さを感じたこと、8月15日終戦当日のことなど、国民学校1年生だった時に感じたことをそのまま語ってもらった。

また、終戦後にGHQがやってきて、本家の伯母が、振袖を一枚差し出して帰ってもらった光景を電話室の中から見つめていたことなどが語られ、その後で、実際に本家に移動してもらい、母が隠れていた電話室や、疎開児童たちが過ごした部屋も見てもらった。



Fig. 7 The context for recounted war experiences

4. 成果

2日間で100人弱の来場者となった。展示については国民学校の教師たちが克明に付けていた学校日誌が国の方針を伝える歴史的な証拠となり、当家で所有している品物がどのような意味を持つかということを示すことができた。

また、展示品に加え、集団疎開児童を受け入れた本家、防空壕への経路と移動してもらったので、来場者全員ではなかったが、当時の様子を体感してもらうことができた。

そして、まだ幼かったにせよ戦争を生きぬいてきた母の語りによって、先の戦争が決して過去のものではなく、現在を生きている人の生き方、暮らしに繋がっているのだということを感じ取れるものとなったと自負できた。

筆者自身が幼い頃から、こうした母や亡くなった祖父母の語りを聞いて育った。それが、現在の専攻である児童文学・文化を研究することに繋がり、今回の企画を立ち上げるに至ったことは否定できない。来場者の子どもたちの中に一人でもこうした歴史と自分との関連性を感じてもらえたらと思う。

5. 今後の課題

「子どもたちと“戦争”展」は、「12月8日」という太平洋戦争開戦の日に開催したいと考えてきた。日本人は終戦の日と共に開戦の日もおぼえておくべきであると考えていたからである。8月15日はもちろん大切な日である。しかし戦争について考える日が、この日だけになってしまっている現実を憂慮してきた。自分たちが苦しく悲しかった日だけを思うというのは、我が身に被害や痛みがなければ戦争は

していいのか、ということになりかねない。しかし、開戦の日に開催するというのは意味あることだが、さまざまな課題が見えてきたのも事実だ。

12月8日の開催となると、寒さの問題がでてくる。昭和16年の開戦の日も雪が降ったと聞いているが、企画展の開催日も雪がちらついた。東北地方の宮城県での開催し、来場者を招くことを考えると、天候による足場の悪さや寒さの問題が出てくる。バリアフリーなどの設備がない個人宅—しかも、古い建造物での開催となると安全面をどう考慮するかが課題である。

また、来場者には大学生、中学生などの来場者はあったものの小学生への周知が不足していたため、子どもの来場者が少なかった。今後は近隣の小学校にもよびかけたい。行事は年度のはじめに計画されるので、小学校には早目の打診が必要だろう。

また、これがもっとも重要な課題であるが、戦争に関心を持つのは主に高齢者だ。しかし、現実問題として「戦争を伝える」ことの重要性を認識しながら、戦後生まれの我々が戦争を伝えようとする「実際の苦勞を知りもしないくせに」という声上がる。今回も開催にあたり、そういった声があった。戦後生まれの筆者が企画したことに対して批判の声が上がることはもとより覚悟していたが、終戦当時小学1年生だった母が体験を語るとなった時に、昭和一桁生まれの訪問客から、「勤勞奉仕もしていない洩垂れだたくせに」という声があった。

だが、時の流れとともに戦争体験者の数は減少し続けるのは必至である。しかも戦争体験と言えば「食糧難と空襲」という型通りの内容になりがちだ。それだけでは意味がない。もっとも大きな課題として、こうした企画の必要性を伝えていくことが重要だ。それには、回数と年月がかかるであろう。

さらに、今後、この企画を継続できるかどうかについてだが、やはりさまざまな課題がある。母は非常に今回の企画に協力的だったが、実家での開催ということがあり、気に入らないとする身内からの反発もあった。母自身の体力が高齢によって無理が利かなくなり、語り部をやらしてもらえなくなることも現実となることだろう。

また政治的に中立であることも死守したい。今回、政治的なグループからの接触があった。筆者はあくまで中立を保ち、できることなら1人で続けたいと考えている。筆者の一番の目的は、次世代の子ども

たちに伝えることであった。そのためには政治的な偏りは絶対に避けたい。

平成最後の年に開催した企画展であったが、令和最初の年にも開催したいと考えている。今回は歴史的な流れを中心にしてきたが、次の企画展では一つ一つの展示物について、詳細に分析していきたい。ありがたいことに、この企画展終了後、子どもと戦争に関わる品を方々から、譲り受けることになった。筆者の企画の意図に賛同した人や、必要性を大切に思いながらも高齢で、伝えることを困難に思う方々が、筆者に今後とも企画展を継続し、伝達して欲しいと託してくれた品である。例えば、戦前・戦中を中心に発行された大日本雄辯会講談社の「子どもが良くなる繪本」などがある。こうしたものへの分析・考察を加えた企画展にしていければと願っている。

【謝辞】

今回の企画展と本研究を行うにあたり、国民学校の学校日誌を保存し、パネル展示をご快諾くださった宮城県村田町歴史みらい館の皆様へ深く感謝いたします。さらに宮城学院女子大学学芸学部人間文化

学科の大平聡教授の長年にわたる綿密な研究調査の中から、的確な学校日誌を見つけて、パネルにさせていただくことができました。筆者が一覧にした展示品の数々がどのような意味を持っているのか、それらが国策とどのようにかかわっているのかを学校日誌と共に展示したことによって、明確化させることができました。この場を借りて深く感謝いたします。そして、本家・当家であの戦争の中で生き、それを遺してきた先祖にも頭を下げたいと思います。

【注】

- 注1) 川口ランディ：「時の川」、『被爆のマリア』、文藝春秋（2009）
注2) 大沼悦子：『紅花と村田の一商人』、（1997）

【参考文献】

- ・ 山中恒『子どもたちの太平洋戦争 - 国民学校の時代』（岩波新書）（1986）
本稿は、2019年5月5日に日本保育学会第73回研究大会（於・大妻女子大学）での口頭発表を大幅に加筆修正したものである。